

## 文禄・慶長の役の伝承に関する研究 —朝鮮軍記を中心に—

### Study on transmission of Japanese invasion of Korea in 1592

—A Focus on Chosen-Gunki (War Chronicles)—

一瀬 千恵子 (東アジア歴史論)

[ichinose@cneas.tohoku.ac.jp](mailto:ichinose@cneas.tohoku.ac.jp) (内3757), D3, 指導教員: 平川 新

[キーワード] 文禄慶長の役, 壬辰倭乱, 朝鮮軍記

文禄・慶長の役（壬辰倭乱：1592～1592）は秀吉の死没とともに幕を閉じたが、今日に至るまで、さまざまな評価を受け、秀吉の評価も変遷してきた。本研究は、朝鮮軍記を通して、近世初期から幕末に至るまで、その時代の風潮のなかで戦争評価、秀吉評価、対朝鮮認識、自国認識等が、どのような揺れをみせながら継承されてきたのかを探るものである。朝鮮軍記とは豊臣秀吉の朝鮮出兵について、日本で書かれた軍記物語の諸本を指す。『太閤記』や『絵本太閤記』は秀吉の一代記として書かれたものだが、朝鮮出兵に関わる部分を含むので、これらも検討の対象に入れる。軍記諸本は話の出所も明確でなく、筆者の主観や潤色が多分に含まれているが、成立した時代の思想を反映するものであり、その時代の価値観を探る史料となりうると考える。

江戸時代初期には小瀬甫庵『太閤記』（1625 序文）、堀正意『朝鮮征伐記』（～1644 成立、1659 刊）が書かれた。これらの朝鮮軍記は秀吉の朝鮮出兵を否定的に評価した。その戦争は秀吉の驕りと狂気から企てられたものであり、自国の民を困窮させ、国家の財を無駄に費やすものであったとして、撫民仁政という視点から批判した。ただ、「武勇知謀あくまで長じ、剩え朝鮮まで随え給ひき」（『太閤記』）というように、朝鮮出兵を否定的に評価してはいても、武威をふるうことを美なることとし、必ずしも「侵略」という悪とは評価していないことがうかがえる。

江戸中期に、朝鮮の柳成龍『懲毖録』（1647 刊・和刻本 1695 刊）が日本に移入した後に成立した釈姓貴『朝鮮軍記大全』（1704 刊）、馬場信意『朝鮮太平記』（1705 刊）には、戦争による朝鮮国土の荒廃、人民の飢餓の惨状が記されるようになり、戦争相手国の民の困窮にも目を向けられるようになった。また、敵国の人民を恣意的に殺すことへの批判も記されるようになり、それと同時に、「武を万里に贖す」、「覇権の術に暗まされ」という言葉に象徴されるように、戦争そのものを相対化して本質を問う視点も見られるようになった。

江戸中期、1700年頃まで次々出版されてきた朝鮮軍記は、それ以後1800年頃までの100年間、新規出版が途絶える。その原因は、著作権の規制（重版・類版禁止令）に因るものなのか、享保・寛政年間の幕府の出版取り締まり強化に因るものなのか、今後検討してゆく。

江戸後期になると、岡田玉山『絵本太閤記』（1797～1802 刊）が庶民の人気を博し、川柳や浮世絵の題材にもなった。この本は『朝鮮軍記大全』や『朝鮮太平記』の内容を継承し、さらに石川五右衛門など多数の講談説話を加えている。注目したいのは、『絵本太閤記』七篇附言である。「今の世の俗小人みだりに公の行状を誹謗し…（中略）…腐儒燕雀の心を以ていかでか傑出英雄鵠鴻の大志をはからんや…和漢いまだかくの如き俊傑ある事を聞かず」と秀吉を賞賛する。本の読者層の拡大とも関わるが、江戸初期から秀吉評価が大きく変化したことが認められる。